



のうりん すい さん だいじん しょう
農林水産大臣賞

父が選んだ道

神奈川県厚木市立相川中学校一年

大貫 桜和

父は五年前、今まで働いていた会社を辞めて、実家の農家を継ぐ決心をした。父から厚木に引っ越しする、そして農家になる。と聞かされた時、私はそのころ『親友』ができたばかりで楽しかったからいやだった。その日私はふとんの中で泣いた。今まで生まれ育った町や、仲良くしてきた友達のこと、学校、バスケットボールクラブのことなど様々な思いがよぎり、「引っ越しをしたくない」気持ちと、「父を応援したい」という気持ちの半分ずつの気持ち交互に入りまじり、揺れ動いていた。何度も家族で話し合いをし、準備を進めていくなかで、父を応援する気持ちが強くなっていった。そして父は農家一年生になった。

父はそれまで農家に関する知識はほとんどなく、農業普及指導者さんという方や、農業講習会に参加し、勉強していた。また祖父や祖母に聞きながら学ぶことも多くあり、日々努力をしていた。引っこした翌年、祖父が他界し、いよいよ父が田んぼや畑を守ることとなった。朝早く日が昇ると同時に田んぼの見回りに出かけ、用水路から田んぼに入れる水の調整や雑草の除去などをして、朝ごはん前にひと汗かいて帰ってくる生活が始まった。農薬の散布時期や収穫に向けての準備など毎日あわただしく働いていた。

学校から私が帰ってきて宿題をしているととなりで父も農家の参考書を広げて一緒に勉強し、米や野菜の知識を身に付けていった。米と野菜農家として、学びながら作っていく姿勢はすごいものだと思った。苦労して収穫したお米が初めて新米として食卓に上ったとき、父も母も、祖母も笑顔で、「おいしいお米だね」そう言いながら家族で笑顔で食事をし

た。お米はこんなに作るのが大変なんだ、父はがんばっているな。私はそう思って父の努力が実を結んでいることに対して素直に感心した。父は自分で選んだ道を努力しながら歩んでいた。

「今年から苺も作ろうと思うんだ。お父さんの夢なんだよ苺づくり。」父は昨年の春、そう言つて苺の苗を作り始めた。祖母も母も、まだまだ農家として勉強中なのにそんな簡単にできるものかと、当初は反対していた。しかし父はにこにこ笑いながら、「父さんのおじいちゃんかね、昔苺を作っていたんだよ。その時自分もやってみたいと思っただよ。」苺は病気になるやすいからせんさいなんだ。だから作ってみたいんだよ。」と言っていた。真夏の暑いさなかに沢山苗を作り、苺の定植準備を始めた。そんな時だった。あたり一面の田んぼを見渡していると、稲の育ちの悪い田んぼがいくつもあることに気づいた。そこは私の家の田んぼだった。確実に稲の成長が悪く、中には枯れている場所もあった。私は驚いて走つて父のもとへ行き、「田んぼの稲おかしくない？なんで？」と聞いた。父は悲しそうに「今年はずまく米を育てられなかったんだ。失敗してしまったよ。」と。その年の秋は、稲刈りのない、新米のない寂しい秋だった。

今年の春、父は念には念を入れて田植えの準備を始めた。例年より多く代掻きをし、土を安定させて、畝の草刈りをし、田んぼの整備をしていた。慎重に田植えをし、いつもよりゆっくりとしたペースで田植えをしていった。苺の苗づくりと同時に進行での田んぼの管理は、手のかかる時期が同じだから、難しいそうだった。しかし父は今年も黙々と仕事をしている。毎朝、日の出とともに田んぼの見回り、用水路の点検など、田んぼの環境を整えながら、苺の苗も一生懸命作っている。

八月に入り暑い日が続くが、私の家の田んぼは、元気に青々とした絨毯が広がっている。夕日の風に絨毯がゆれ、幸せそうにしている。いつか父に伝えたい。お父さんの選んだ道を、尊敬し、米を作ってみたくて、という事を。